

2nd

- リーディング校の取組
- (1) 飯田市立上村小学校 事例①②+
- (2) 木曾町立三岳小学校 事例③④+
- (3) 栄村立栄小学校 事例⑤⑥⑦+

小学校 異学年合同の学び 自律した個の学び 遠隔合同の学び

6年 Where's Spot?のお話を作って1年生に読み聞かせよう 野沢温泉立 野沢温泉小学校

実践スタイル 異学年との交流を目指し、相手意識をもって活動を工夫する取り組み

本時のねらい

Today's Goal: お互いに見合ったり、数語を見直したりして、1年生に楽しんでもらえるように、絵本の読み方を工夫しよう。

Today's Point: ・大事な言葉をはっきり ・相手の顔を見ながら(わからなかったら繰り返す)

主に活用した教材・コンテンツ・ICT機器等とそのねらい

教材等 ①英語の絵本 *Here's Spot?*
②タブレット端末(録画用)

ねらい ①繰り返しの表現からストーリーが理解しやすい、作成する絵本のモデルとする。
②録画した自分たちの読み方を、客観的に振り返り、改善点を見つける。

学習者のユニットとその意図

6学年では、異学年の1年生に自作の英語絵本を読み聞かせることを単元の目標とし、「1年生に合わせるように」「1年生が楽しめるように」という、目的や相手意識を大切にした外国語活動に取り組んだ。

単元の流れ	主な学習活動	異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
・絵本や英語の表現と出会う	前置詞の意味や言い方を知り、ゲームなどを進めて慣れ親しむ。	・自立した個の学び	1～2
・表現に慣れ親しむ	<i>Here's Spot?</i> のお話を聞いて、内容や面白さを理解し、動物や場所をアレンジした絵本を作る。	(異学年を考慮して)	3～6
・1年生を意識して内容や伝え方を工夫する	読み聞かせの練習や工夫をする。	(異学年を考慮して)	7～9
・実際に発表をする	1年生に読み聞かせをする。	・異学年合同の学び	10

写真1 自分たちで作った絵本の読み聞かせ方について、グループで話し合う児童

写真2 互いのグループの読み聞かせを聞き合い、読み方について意見し合う児童

写真3 単元の終業で、工夫してきた読み方で1年生に読み聞かせをしている児童

○活用した教材・コンテンツ・ICT機器等のねらいは授業準備にいかせそうなことを記述しました。

○学習者のユニットとその意図では、児童生徒の学習形態や意図について記述しました。

○活用効果(アセスメント)では、評価の観点や具体的変容について記述しました。

○実践の手応え(エビデンス)では、学びによって授業者が感じる成果について記述しました。

児童生徒の学び(異学年合同の学びによせて)

野沢温泉学園の「英語学習」(こども園の「英語あそび」)小学校の「外国語活動」中学校の「外国語」の総称)では、幼保小中一貫のカリキュラムがあり、異校種や異学年の子どもたちが合同で学ぶ機会が年間計画に位置付けている。子どもたちは、年間数回、異校種や異学年の子どもとの英語を使ったやり取りに取り組んでいる。

今回の6年生の授業では、単元の終業に「1年生に自作の英語絵本を読み聞かせること」を Lesson Goalとして設定した。LLTの読み聞かせをモデルとして指示すると、LLTと同じように自分たちが1年生へ読み聞かせてみたい気持ちや、1年生に絵本を楽しんでもらえるように、読み方を工夫しよう」と設定し、本時ではまず Today's Goal を「1年生に楽しんでもらえるように、読み方を工夫しよう」と設定し、そのためのポイントを出し合った。「話が分からなかったらつまらないよね」「なるべく簡単な英語にしよう」「聞こえないといけないから大きな声でやろう」「反応を見てわからなそうだったらもう一回ゆっくり言う」などの児童の発言をもとに、Today's Pointとして「大事な言葉をはっきり」「相手の顔を見て」が共有された。

グループで意見交換(写真1)では、実際にやってみながら、セントの出し方や、絵を隠してある紙のまくり方などについての練習が主になり、まだ「読み方」の工夫には至っていない面が多かった。互いのグループを見てアドバイスをし合う場面(写真2)では、見ていたグループから「絵本のほうばかり見ているよ」「タコは星のところは何で言ったの?」など、Today's Pointに沿った意見が出された。意見もらったグループは、「顔の数が伝わらなかった。eightはゆっくりに話さないと、本番は1年生に聞いてもらうんたし。」「やっぱり顔を見ていないと、伝わったかどうかわからないね」と他のグループからの意見をもとに「読み方」の工夫を具体的にしていくなされた。

授業のねらいを明確にするため、Today's Goal と Today's Point が設定されても、それらが本当に子どもの課題(問い)となるには、やはり実際に英語を使って他者とやり取りをすることが必要である。上記の要のように、多くの児童は、他のグループからのアドバイスを受けて、初めて「相手」に意識が向く。1年生に楽しんでもらうには、どう読めばいいか、と追究が始まったと考えられる。

活用効果(アセスメント)

評価の観点	Today's Point を観点として、Today's Goal が達成されたかを評価する。
具体的変容	Today's Point「大事な言葉をはっきり」に沿ったアドバイスを受け、「1年生に楽しんでもらえるように」という Today's Goal の達成のため、タコの星の数を「three をはっきりゆっくりに話そう」と、「読み方」の工夫をする姿が見られた。

実践の手応え(エビデンス)

公開授業の経過。実際に1年生への読み聞かせを行った場面(写真3)では、6年生が1年生をやさしく思いやりながら絵本の読み聞かせている姿が見られた。何度も練習を繰り返した6年生は、英文はすでにスラスラ言えるようになっていくが、早口で一方向的に発表するようなことはなく、しっかりと1年生の反応を見て、反応を確認しながら読み聞かせていた。1年生の表情が曇ったときは、ゆっくりに、動物の名称などを繰り返したり、ジェスチャーで伝えようとしたりしながら、相手に応じた読み方の工夫をすることができた。

事例①

小学校	異学年合同の学び	自律した個の学び	遠隔合同の学び
4年	社会科『郷土の発展につくす』		飯田市立上村小学校
実践スタイル	遠隔会議システムを用いたそれぞれの地域の特色の紹介および、比較による学びの深化。		

本時のねらい

それぞれの地域の発展に尽くした人について知った子どもたちが、違っていることや共通することに関心をもち、目を向けて比べ、伝え合うことで、それぞれの人の郷土への思いや、地域の人々の感謝の思いに気付くことができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

- ・遠隔会議システム xSync Prime Academic(バイシンク プライム アカデミック)
- ・電子黒板・書画カメラによる資料提示

意図

- ・遠隔会議システムを使って和田小学校・天龍小学校の児童と交流し、自分の考えを伝えたり他校の仲間の考えを聞いたりする。そして、友の考えと比較することで、自分の考えを深める。

学習者のユニットとその意図

上村小学校（1名）、和田小学校（5名）、天龍小学校（4名）の4年生は、集合学習や遠隔合同学習とともに学び、互いの学習の様子や地域のことには関心がある。そこで、それぞれの学校で調べた郷土の発展に尽くした人を、遠隔会議システムを通して紹介し合うことで、自分たちの地域の学習から、発展して他の地域の人々についても関心を持ってほしいと考えた。

単元の流れ	主な学習活動	学習スタイル	授業時数
1 学習問題をつかむ	<ul style="list-style-type: none"> ・赤石林道ができるまでの上村の暮らしについて知る。 ・単元の学習計画を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び 	2時間
2 調べる	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の方の話から、赤石林道ができる前の様子や人々の思いを知る。 ・松下逸雄さんや歴代の村長が、道を開くことに力を注いでいたことを知る。 ・松下逸雄さんについて、資料を調べたり地域の方に話を聞いたりする。 ・赤石林道ができた後の上村について、当時の様子を知る方から話を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自律した個の学び 	7時間
3 まとめる	<ul style="list-style-type: none"> ・松下逸雄さんのはたらきや道路ができたことによる生活の変化を年表にまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自律した個の学び 	2時間
	<ul style="list-style-type: none"> ・他校の発表を聞き、他地域の発展に尽くした人について、学び合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・遠隔合同の学び 	2時間

事例①



他校の発表を集中して聞き、学習カードに書き込みしているN児



書画カメラと電子黒板を用いた板書や資料提示



担任に加え、各校職員や主事も参加した研究会

児童生徒の学び（全国へき地教育研究大会の姿から）

上村小学校4年生A生は、1名の学年で、社会科をはじめ多くの授業をそれぞれの教科担当と一対一で行っている。その影響もあるのか、自分のペースで勉強ができる反面、人から話を聞いて学ぶことにはなかなか意欲が持てないでいた。

今回、初代上村村長の松下逸雄さんについて学習していく中で、同じ時期に南信濃や天龍村でも、生活が苦しかったり災害に苦しんでいたりと問題を抱えていたことを知り、A生は他地域のことに興味を持つようになった。和田小学校や天龍小学校も同様の学習をしているのではないかと考え、自分から遠隔合同学習を提案した。日程を合わせて遠隔学習を行う事が決まると、A生は課題を持って取材活動を行うようになり、積極的に話を聞こうとする姿を見せるようになった。これは「伝えたい」というだけでなく、「松下逸雄さんとのつながりを知りたい」という意欲が、A生の中に芽生えたからであろうと思われる。

遠隔合同授業においても、意欲的に他校の友だちの話を聞いたり、資料にくぎ付けになったりする様子が見られた。天龍村の熊谷長三郎さんが防災のために植林を始めたことを聞くと、「松下逸雄さんの道作りも、災害から地域を守るためだった。同じなんだ」と気づき、自らも調べていた「当時の人々が災害に悩まされていたこと」などを振り返っていた。また、「上村は災害により仕事を失う人が多かったこと」と「南信濃地区が近藤知三郎さんの尽力で、働く場所や娯楽施設が多くなったこと」をつなげ、郷土の発展と防災、就労につながりがあることを感じる事ができていた。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	遠隔会議システムを使って話し合ったことで、各校の児童が調べた3人(松下さん、熊谷さん、近藤さん)に、郷土を守ろうという共通した思いがあることに気付くことができる。
具体的変容	・他の学校の発表を聞くことで、どの地域にも郷土を守りたいという思いから尽力した人がいることが分かった。 ・郷土の発展は他地域のつながりだけでなく、防災や就労も関わりがあることに気付いた。

実践の手応え（エビデンス）

三校それぞれでまとめたものを発表し合うことで、自分たちの地域だけでなく、他地域の様子にも、さらに関心を深められるようになった。また、それぞれが調べた人の思いだけでなく、地域の発展には防災など様々なことが関わってくることに気付くことができた。

学習環境面においては、電子黒板での板書や複数の通信機器の活用など、これまでとは違った試みがなされた。引き続きよりよい学習環境や研究会のあり方を考えていきたい。

学習者のユニットとその意図

5年生男子2名、女子1名、6年生女子1名、合計4名での複式学級として日々の学習を進めている。その中で、理科も5、6年生一緒に進めているが、小規模特認校の関係で児童の転出入を考慮し、複式学年別学習として取り組んでいる。

単元のねらい

5年：電流は鉄心を磁化する働きがあることや電磁石にはその極や強さに特性があることがわかる。
6年：発電や蓄電、電気の変換について理解し、効率的な電気の利用を考えることができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

5年：主体的に動きやすくするために、単元全体に渡って学習に使う物（電磁石、鉄心、導線、検流計、電流計、モーターなど）を児童の近くに準備する。

意 図

6年：5年と同じに準備しておく。効率的な電気の利用の確認のため、手軽に準備がしやすく試しやすいmicro:bit でプログラミングができる環境を整える。

単元の流れ	主な学習活動	異学年合同の学び 自律した個の学び 遠隔合同の学び	授業時数
学習計画	・単元のガイダンス ・個々による単元全体の学習計画	・異学年合同の学び	1 時間
追 究	・自分の計画を参考に個々に学習の追究をする。(自由進度学習)	・自律した個の学び	13 時間
	・自分の計画を参考に発展学習をする。(時間に余裕がある場合)	・自律した個の学び	上記 13 時間に含む
まとめ	・単元全体の振り返り ・学習発表会	・異学年合同の学び	1 時間



ノーベル化学賞の新聞を見ながら、リチウム電池の話で盛り上がる5・6年生



街灯のプログラミングをし、点灯・消灯の丁度良いタイミングを探し続ける6年生



棒磁石にできるだけ釘をつけようと、納得のいくまでやり続ける5年生

児童の学び (全国へき地教育研究大会の姿から)

5年生A生は、導入時から6年生の学習に関心が高く、「早くモーターカーをつくりたい」と言っていた。学習計画でも発展学習に「モーターカーをつくる」とだけ書いた。しかし、追究を雑にすることはなく、自分のペースで、こだわりながら学習カードに書かれている実験に集中して取り組んでいた。電磁石や棒磁石に釘をつける場面では、釘のつき方や本数にこだわり、時間をかけてじっくり確かめていた。その分ややゆっくりペースになりがちであったが、終わるべきところまでは間に合わせる事ができた。学習カードへの記録が不十分な場合は、チェックのところで教師が支援したが、書いていないだ

事例②

けで理解していることがほとんどだった。楽しみにしていたモーターカーづくりでは、スピードを速くしようと試行錯誤を繰り返していた。意欲が切れることはなく、振り返りの中で最後まで次への目標を進んで決めることができた。単元終わりのテストでは初めて満点をとることができた。全体の振り返りで「この学習のやり方は、ぼくに合っている。とてもよくわかった」と言った。思うようにいかず困ったこともあったが、自分のペースでできたことが、確かな学びにつながったのではないかと思う。

6年生B生は、もともと1名だけなので「一人学び」が続く自由進度学習にはさほど新鮮味がなかったようだ。しかし、個々の学習計画を立てる時には、今までのやり方と違っていたので、「自分のしたい実験ができるんだ」と意欲を膨らませていた。何事も確実にこなしていく児童なので、教師は確認することのみで、ほぼ自分の力で計画通りに進めていった。学習毎の振り返りも学習内容に沿ってわかったこと等を自分の言葉でまとめることができた。また「なぜコンデンサーに電気はためられるのか」等の疑問も持つことができた。発展学習に入って、風力発電機をつくる計画であったが、発泡スチロールカッターをつくることに変更した。前時に学習した「電気は熱に変わる」で、ろうそくが切断されたことに相当驚いたことが影響していると思われる。最後に効率的な電気の利用ということでプログラミング学習に挑戦した。身近な街灯や防犯灯がプログラムによって動いていることを知った児童は、教師からのヒントカードをもとにmicro:bitを使ってプログラミングをし、街灯や防犯灯と同じような反応をするのか、進んで確かめ、その良さを実感することができた。この学習をして「自分のやりたいことができる。友だちとの協力ができるようになった」と言っており、時間が許す限り、繰り返し実験、自分が工夫した実験、自分がやりたいものづくり等、最初から最後まで主体的に学習に取り組めたことが、確かな学びにつながっているのではないかと感じた。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	実験やプログラミングに必要なものを判断し、主体的に取り組もうとする。
具体的変容	一人一人の子どもの近くに器具や材料等が入った箱を置くことにより、子どもたちは自分の計画に沿って必要な器具等を取り出し、自分なりに工夫しながら主体的に取り組めるようになっていった。C生は、電磁石づくりやモーターづくりでうまくいかない時に、必要なものは何かを考え、工夫して解決していこうと繰り返し挑戦する姿があった。A生は、最初、必要なものをすぐ教師に聞いてしまったが、電磁石づくりでこだわりが出てくると自分で必要なものを探し出し、納得がいくまで挑戦する姿があった。B生は、プログラミングで使うブロックの配列で試行錯誤していたが、ヒントカードを参考にプログラミングができ、さらに工夫をする姿があった。

実践の手応え（エビデンス）

自由進度学習は教師も子どもも初めての経験であった。それまでは複式学年別学習で「一人学び」と学び合いをしてきたが、もっと「一人学び」の時間を増やして、子ども一人一人のペースで進めることにより満足感や達成感を味わってほしいという願いを持ち、試してみた。結果は、教師も子どもも自由進度学習に対して良い手応えを感じるものになった。1つめは、単元全体を見通して児童が自分で学習計画を立てることで、関心・意欲をさらに高めることができた。2つめは、追究時、自分のこだわりによって同じ実験を繰り返したり、チェックで教師に言われたことを確認したりして自分のペースで集中して取り組み続けることができた。3つめは、できない、わからないということが続いても自分で何とかしたいという気持ちがだんだん高まり、学習意欲が落ちることなく、最後まで進めることができた。4つめは、「一人学び」であっても、異学年であっても、時には互いに声を掛け合い、進捗状況や励ましの言葉を伝え合う姿が自然に生まれていた。同じ電気関係の学習を組むことで異学年交流を自然に行うことができた。5つめは、ちょっとしたことで、教科書にない、自分の計画にもないことを進んで試みることができた。本来、「自由進度学習は二教科で」と言われているが、複式学年別で行う場合、一教科でも二学年分の準備をしなくてはならないので、複式学年別では上記のような良い手応えが出ていることを受け、一教科で進めていっても良いのではないかと考える。

理科におけるプログラミング教育も初めての経験であった。新学習指導要領の中で例として「電気の利用」、特に効率的な電気の利用についての学習の中で、と言われているが、効率的に電気を利用している身近な街灯や防犯灯に着目したことで、プログラミングのイメージがしやすく、論理的な思考へと結びつけることができた。また、使うブロックのヒントカードを提示することにより意欲が高まり、集中して取り組み続けることができた。micro:bit はシミュレーションでプログラムを確認できたり、本体をパソコンから離して、持ち歩きながらいろいろな場所で試すことができたりするので、追究の幅を広げることに繋がった。

令和元年度 中山間地リーディング校 新たな学び年間計画

飯田市立上村小学校

異学年合同の学び

異学年合同の学び
±自律した個の学び

自律した個の学び

自律した個の学び
±異学年合同の学び

遠隔合同の学び

集合学習

学年	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月																										
1学年	生活・総合的な学習の時間 ICT 「しいたけを育てよう」	学級活動 ICT 「タブレットの使い方」	算数 複式学年別 1年「たしざん(1)」 2年「たし算とひき算のひっ算(1)」	国語 ICT 「漫才」	体育 ICT 「上っ鼓乱舞2019」 (和太鼓)	算数 複式学年別 1年「たしざん(2)」 2年「かけざん」	音楽 ICT 「ミュージカル」	生活 集合学習 「学校探検」	生活 ICT 「発表会に向けて」	生活 ICT 「わたしたちの1年間」	生活 ICT 「漢字に思いをこめて」	道徳 ICT 「漢字に思いをこめて」																										
2学年		理科 複式学年別 ICT 3年「植物を育てよう」 4年「生き物のくらし～春～」	社会 ICT 「学校のまわり」										体育 集合学習 「水泳」	特別活動 遠隔二校 「保健」 (Zoom)	算数 複式学年別 ICT 3年「分数」 4年「小数×小数」	総合的な学習の時間 ICT 「霜月祭のホームページ作り(ESD)」	図画工作 ICT 「版画」	道徳 ICT 「漢字に思いをこめて」																				
3学年			社会 遠隔三校 「ゴミの行方」 (xSync)										国語 複式学年別 ICT 5年「表現を工夫して書こう」 6年「話し方を工夫してスピーチしよう」	理科 複式学年別 自由進度学習 プログラミング 5年「電流のはたらき」 6年「電気の利用」					体育 集合学習 「ソフトバレーボール」	道徳 集合学習 「おばあちゃんは無理」	音楽 プログラミング 「作曲しよう」	算数 複式学年別 プログラミング 5年「円と正多角形」 6年「見積もりを使って」																
4学年			英語 遠隔三校 「自己紹介」 (xSync)																				国語 複式学年別 ICT 5年「表現を工夫して書こう」 6年「話し方を工夫してスピーチしよう」	理科 複式学年別 自由進度学習 プログラミング 5年「電流のはたらき」 6年「電気の利用」	体育 集合学習 「ソフトバレーボール」	道徳 集合学習 「おばあちゃんは無理」	音楽 プログラミング 「作曲しよう」	算数 複式学年別 プログラミング 5年「円と正多角形」 6年「見積もりを使って」										
5学年			英語 遠隔三校 「自己紹介」 (xSync)																										国語 複式学年別 ICT 5年「表現を工夫して書こう」 6年「話し方を工夫してスピーチしよう」	理科 複式学年別 自由進度学習 プログラミング 5年「電流のはたらき」 6年「電気の利用」	体育 集合学習 「ソフトバレーボール」	道徳 集合学習 「おばあちゃんは無理」	音楽 プログラミング 「作曲しよう」	算数 複式学年別 プログラミング 5年「円と正多角形」 6年「見積もりを使って」				
6学年																																			英語 遠隔三校 「自己紹介」 (xSync)	国語 複式学年別 ICT 5年「表現を工夫して書こう」 6年「話し方を工夫してスピーチしよう」	理科 複式学年別 自由進度学習 プログラミング 5年「電流のはたらき」 6年「電気の利用」	体育 集合学習 「ソフトバレーボール」
全校	なかよしドリル（無学年制自由選択式ドリル）																																					

- ☆ 上記の年間計画は本校の特徴的な学習をピックアップして見やすく並べたもので、実際は下記のことをふまえながら計画する。
- ※ 複式指導(学年別・単元)は、年間を通じて個の指導計画に基づき、ICT機器の活用を図りながら連学年(算数・理科・国語)や全校で進めていく。(異学年合同の学び、自律した個の学び)
- ※ 連携校三小学校の集合学習(遠隔学習を含む)は、4月の合同学年会で年間10時間程度の計画をたて、2月に振り返りをする。(異学年合同の学び、遠隔合同の学び)
- ※ 中学校との連携は、遠隔を使った遠山三校合同の外国語学習を学期に1回計画する。(遠隔合同の学び)
- ※ プログラミング教育は、総合的な学習の時間や算数・理科の教科学習の中で進めていく。(異学年合同の学び、自律した個の学び)

2・3年

自分のペースでトコトン学ぼう

木曾町立三岳小学校

実践スタイル

単元内自由進度学習（一人学び）による自己学習力を高める学び
【2年：国語，生活 3年：算数，理科】

学習者のユニットとその意図

単元内自由進度学習とは、「学習の手引」に示された単元目標や学習内容を参考に、決められた時数内で単元の学習が終わるように自分で学習計画を立てて自分のペースで「一人学び」を進めていく学習である。

少人数学級では、個がよく見えるために必要以上の支援を行ってしまい、受動的な態度を育て、自分で考え抜く力を奪ってしまいがちである。そのため、単元内自由進度学習（一人学び）を設定し、自律的に学ぶ力（自己学習力や学習を見通す力、計画力）を育てていくことを目指した。「一人学び」を支えるために、次の点を工夫した。

- ① 学習への興味関心や意欲を高めるためのガイダンス（導入）
- ② 学習内容の見通しをもち、計画的に取り組んでいくための学習の手引や計画表の準備
- ③ 自分で学習問題を読み解きながら自学できるための学習シートの作成
- ④ 学習意欲の持続や学習内容を活用し学びをつなげていくための発展学習

また、複式学級での新たな学習指導としてカリキュラムに取り入れられるかを検討するために、複数年間で同一時間、同一学習空間での授業実践も設定した。【5年理科「ふりこ」、6年理科「てこのはたらき」】

本時のねらい

- ・2年：国語「しかけカードの作り方」、生活科「おもちゃ作り」※二教科同時
- ・3年：算数「おもさ」、理科「ものの重さをくらべよう」※二教科同時

自分で立てた学習計画に従って取り組む中で、自分が抱いた問題を解決するために自分なりに方法を選択して納得いくまで追究したり、友だちと学び合ったりすることで、学習内容を理解していく。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

- ・学習の手引 ・計画表 ・学習シート ・関係する図書
- ・学習環境（見本，学習に関連した問題や情報，発展学習）

意図

- ・一人学びを進めていくためには、追究の助けとなる学習材が必要であり、個の特性や追究の状況に応じて自分で選択できるように準備しておく。

単元の流れ	主な学習活動（時数）		・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び
	2年生（18時間）	3年生（13時間）	
1 導入（全体）	○ガイダンスをする ・単元内容に関わる導入をする ・単元の目標・学習内容を確認する ・学習計画を立てる	○ガイダンスをする ・単元内容に関わる導入をする ・単元の目標・学習内容を確認する ・学習計画を立てる	・自律した個の学び
2 追究（個人）	○学習の手引に従って学習を進める ①しかけカードを作る ②作り方を説明する ③作るおもちゃを選んで作る ④おもちゃの作り方の説明を書く ⑤発展学習（好きなおもちゃ作り，おもちゃアレンジ）	○学習の手引に従って学習を進める ①重さの測り方や計器のメモリの読み方を確認する（全体） ※算数か理科を自分で選んで学習する ②重さの計算をする【算数】 ③ものの重さをくらべる【理科】 ④発展学習（やじろべえ作り，ダンベル作り，1人分のお菓子作り）	
3 まとめ（全体）	○学習したことを振り返る	○学習したことを振り返る	

事例③



写真1：学習シートを見ながら1人でしかけカードを作る（2年生）



写真2：一斉授業の時とは違う子ども同士の関わり合い（2年生）



写真3：児童がワクワクするような学習環境の工夫



写真4：学習への興味関心や意欲を高める導入の工夫（3年生）



写真5：一人でやり遂げられた喜びを先生に伝える児童（3年生）



写真6：学習したことを生かしてお菓子作り（発展学習）（3年生）

児童生徒の学び（自律した個の学び）

自由進度学習では、その時間に自分が学習することを自分で確認して進めていかなければいけないので、人任せにすることがなく、自分なりに問題を読み解いて学習を進めようとする様子が見られた。また、追究の時間は教師による時間で区切られているわけではないので、上手いかないときにはやり直したり、納得がいくまで繰り返したりすることができるため、学習内容を自分なりに理解しようと努力することができていた。それと、1つの実験や課題、単元の学習内容を自分の力でやり遂げられたことから、達成感を味わうこともできていた。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	学習の手引に従い、個のペースで学習を進めていくことで、主体的に学習に取り組み、学習する力ややり遂げた達成感を味わいながら、学習内容を理解することができる。
具体的変容	これまでは「できる人」が中心となって授業が進んでいたことが、一人一人に学ぶ機会が保障されることで、自分で進めなければならない状況が意図的に生まれ、問題を自分なりに読み解きながら解決しようとする学習力を高め、達成感を味わうことができた。

実践の手応え（エビデンス）

一般的に行われている一斉学習では見られなかった学習に取り組む姿が、自由進度学習では見られることがある。どうしても周りの子と同じペースで進めていくことが難しい子も、自分のペースで学習が進められることで、教室の中でも安心して学ぶことができ、時にはいつもとは立場が逆転して教え合うようなことも生まれることがある。

自己学習力が高まってくると集団学習の質も高まっていくのではないかと考えられるので、様々な学習方法をバランスよくカリキュラムに編成していくことが必要である。

事例④

小学校	異学年合同の学び	自律した個の学び	遠隔合同の学び
3・4・5・6年		他学年の書き方の良さをまねよう	
木曾町立三岳小学校			

実践スタイル	異学年との学びによる新たな見方や考え方への気づきと学習意欲の向上 【3・4・5・6年生 書写】
--------	----------------------------------------------------

学習者のユニットとその意図

4つの学年（3・4・5・6年）合同で行うことで、今年度から毛筆を始めた3年生も、上級生の書き方を手本にして良さを真似しようとしたり、上級生は、下級生の見本となれるように姿勢や書き方を普段よりも意識して取り組めたりするのではないかと考えた。また、上級生や下級生関係なく、書写が得意な児童が、同学年だけでなく他学年の児童からも認められることで、自己肯定感を高めたり、他者の良さに気づき、それを認め合える関係を築いたりする機会になることも願った。

また、4つの学年合同にすることで、指導や支援にあたる職員が増えるため、個に応じた支援がしやすくなったり、専門性を活かした指導を行えたりすると考え、設定をした。

本時のねらい

書写を4つの学年合同で行うことで、他学年の習字の良さに気づき、それを自己の練習に活かしなが
ら、課題の文字を丁寧に書くことができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

- ・模造紙大の手本
- ・電子黒板（タイムスケジュールや振り返りの仕方の提示）
- ・付箋

意 図

- ・模造紙大の手本は、教室より広めの多目的ホールで学習をするため、少し離れた場所からでも見えるようにした。付箋は、振り返りで同学年や他学年の友へ、感想を記入して伝えるために用意した。タイムスケジュールを提示することで、見通しをもちながら自分で学習を進められるようにした。

単元の流れ	主な学習活動	<ul style="list-style-type: none"> ・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び 	授業時数
1 学習問題の把握	・学年ごとの目標を知り、書く時に気を付ける点を確認する。	異学年合同の学び	2時間
2 追究	・気を付ける点を意識して取り組む。		
3 まとめ	・作品を見合い、感想を伝える。		

事例④



写真1：学年ごとに目標や書く時に注意することを確認

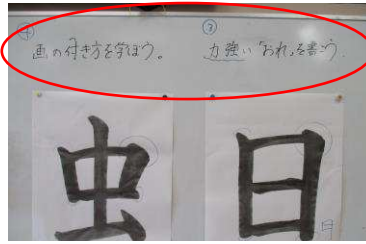


写真2：学年ごとに設定された目標



写真3：異学年で座席を配置



写真4：追究の中で再度押さえていたいことがあれば、その学年だけをまとめて指導



写真5：個に応じた支援

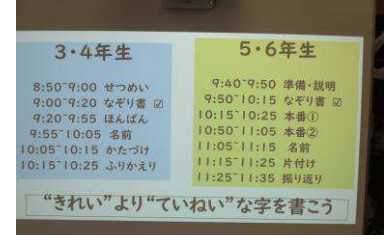


写真6：学年ごとのタイムスケジュールを電子黒板で提示

児童生徒の学び（異学年合同の学びによせて）

異学年合同で学習することで、いつもとは違う緊張感で授業に臨んでいる児童が多くいた。隣に座る他学年の様子を見ることで、「もっときれいに書きたい」や「6年生みたいに書きたい」など、より高い目標を設定して書こうとする様子が見られた。また、下の学年が上の学年の書き方を参考にするだけでなく、逆に上の学年が下の学年の良さに刺激を受け、手本や目標を意識しながら、より集中して取り組む姿もあった。中には、隣の友だけでなく別の学年の様子を見て回ったり、書き方を教え合ったりする児童もいた。

書き終えた作品を見合う場面では、自分の振り返りを赤の付箋に、友の作品への感想を青の付箋に記入し、渡していた。画の書き方の良さや字のバランスなどに着目して作品を見合うことができていた。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	異学年合同で学習することで、学習意欲を高めたり、他者の良さに気づき、それを認め合ったりすることができたか。
具体的変容	異学年合同での学びはいつもとは違う人間関係ができるため、緊張感や意欲が生まれたり、丁寧に書く気持ちや集中力が高まったりしていた。他学年の習字の良さに気づき、それを生かそうとする気持ちも生まれてきていた。

実践の手応え（エビデンス）

異学年合同で学習を組むことで、複数の職員で、より細やかに個に応じた支援を行うことができる。時には、空き時間として活用できるようになると良いかとも思う。少人数学級で学年内では人間関係の組み換えができない環境においては、異学年合同での学習を意図的に仕組んでいくことも必要である。

中山間地リーディング校 「おんたけ」プラン（年間計画）

木曾町立三岳小学校

異学年合同の学び
異学年合同の学び + 自律した個の学び
異学年合同の学び + 遠隔合同の学び
自律した個の学び
自律した個の学び + 異学年合同の学び
遠隔合同の学び
集合学習
集合学習 + 異学年合同の学び

学年	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1学年			音楽 異学年合同 「音楽会に 向けて」 (合奏・合唱)	図画工作 異学年合同 「造形遊び」	生活 異学年合同 集合学習 「学校交流」	体育 異学年合同 「運動会に 向けて」 (表現)	生活 異学年合同 集合学習 「生活科遠足」 ※王滝小	図画工作 異学年合同 集合学習 「造形遊び」 ※王滝小		生活 異学年合同 集合学習 「はがき作り」 ※王滝小		
2学年									国語・生活 自由進度学習 二教科同時 「おもちゃ作り」			
3学年	外国語活動 異学年合同	国語 異学年合同 「書写」		国語 異学年合同 「書写」	特別活動 集合学習 「学校交流」 ※王滝小		国語 異学年合同 「書写」	図画工作 異学年合同 集合学習 「造形遊び」 ※王滝小	算数・理科 自由進度学習 二教科同時 「重さ」	国語 異学年 合同 「書写」		総合的な 学習の時間 異学年合同 「一人総 合」
4学年			音楽 異学年合同 「音楽会に 向けて」 (合奏・合唱)		総合的な 学習の時間 異学年合同 集合学習 「御嶽山に ついて」 ※王滝小	体育 異学年合同 「運動会に 向けて」 (表現)			理科 自由進度学習 「もの あたままり方」			
5学年								体育 異学年合同 集合学習 「ボール 運動」 ※王滝小	理科 自由進度学習 「ふりこ」		特別活動 遠隔合同 「児童会会長選挙」 ※王滝小	
6学年			特別活動 遠隔合同 「児童会祭り について」	算数 自由進度学習 「円の面積」					理科 自由進度学習 「てこの はたらき」		体育 集合学習 「スキー」 ※王滝小	
全校	体育 異学年合同 「体ほぐし運動」	体育 遠隔合同 「運動会表現」 王滝小→三岳小	音楽 遠隔合同 「合唱表現」 三岳小→王滝小	特別活動 集合学習 「児童会祭り」 ※王滝小		体育 遠隔合同 「運動会表現」 三岳小→王滝小		特別活動 集合学習 「児童会祭り」 ※福島小		体育 異学年合同 「体ほぐし運動」		
おんたけ学習（無学年制自由選択式ドリル） 異学年合同・自律した個の学び												

※印・・・集合学習や遠隔合同学習をおこなう時の相手校

事例⑤

小学校

異学年合同の学び

自律した個の学び

遠隔合同の学び

5年

わたしたちの国土(発展的な内容)

栄村立栄小学校

実践スタイル

主体的・対話的で深い学びのグループ学習を遠隔合同の学びで実現

学習者のユニットとその意図

栄小学校4名、秋山分校1名、飯山市立東小学校1名の3つの学級を、Web 会議システムを利用して、2グループ構成にした。2グループは、栄小学校、分校、東小学校各1名をWeb 会議システムで結んだオンライングループと、栄小学校の3名で構成したオフライングループである。秋山分校、東小学校の通常授業では、実現することのできないグループ学習を行った。

単元のねらい

様々な土地のくらしの工夫や特徴を学習した児童たちが、資料から特徴を探し出す場面で、見つけた特徴をヒントに、地図帳や資料集を手がかりにして地域を探すことを通して、グループで予想した地域について根拠を示しながら説明することができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

5つの資料、社会教科書、地図帳、資料集、Web 会議システム

意 図

・手がかりとなる資料から取り出した情報をもとに、地図帳や資料集から追加情報を得て、集めた情報を関連付けて考える情報活用能力を育成する。

単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
低い(高い)土地のくらし、国土の気候の特色、あたたかい(寒い)土地のくらしについて、調べてまとめる学習をしてきた児童が、発展的な学習としてグループ学習を行う。	・手がかりとなる5つの資料(都市の雨温図、写真、イラスト、新聞記事等)から地域に関する特徴を見つけ出し、地図帳や資料集を手がかりにして地域を特定する。	遠隔合同の学び	1時間



グループ構成
(左側がオンライングループ)
栄小学校にて撮影



(5つの資料)



ICT を活用した東小学校の様子
東小学校にて撮影

事例⑤

児童の学び（遠隔合同の学びによせて）

グループごとに活発な話し合いが行われた。5つの資料から、ヒントになりそうなことを出し合っていて、そのヒントに関連する追加情報（地図帳、資料集などの資料）を探し出すことができた。それらの資料を関連付けて、最終的な結論を出していた。

成果としては、グループ学習により、それぞれの子どもが取り出した情報と追加情報をもとに、自分たちで課題を解決することができたことがあげられる。秋山分校と東小学校の児童は、通常、担任と一対一の学習環境になっている。そのような環境では自分一人の考えで授業が進み、新しい考えに気付いたり、自分の考えが深まったりすることが少ない。今回、オンラインによるグループ学習を成立させたことで、自分の考えを示すだけでなく、他者の考えと合わせて吟味しながら、担任がほとんど出ることがなくても子どもたちが協力して課題を解決している授業となった。

課題としては、個に応じた課題の設定である。以前同じような展開で授業を行ったときに、グループで中心となって話し合いを進めていた児童（以下A児）が、本時ではあまり自分から話す様子が見られないということがあった。これは恐らく資料が難しくなったためだと考える。難しくなったことで話し合う意識が高まった児童がいた一方で、A児にとっては自分の意見が言えなくなり、逆に学習を妨げてしまうこととなった。今回の授業では難しい資料を与えた上で、A児の実態に寄り添った支援を考える必要があったと思われる。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	遠隔合同の学びによって、自己の学びを振り返るとともに、新たな視点や考え方にふれることができる。
具体的変容	自分で取り出した情報と友だちからの追加情報をもとに、自分たちで課題を解決することができた。自分の考えを示すだけでなく、他者の考えと合わせて吟味しながら、さらに理解が深められたり、新たな視点に気付いたりすることができた。

実践の手応え（エビデンス）

通常、児童と担任が一対一の学習環境になっているが、Web 会議システムを利用して、複数の学級を結ぶことで、すぐそばにいてグループ学習をしているかのような自然な学習環境を整えることができた。日常的・継続的に遠隔合同の学びを行うことで、より主体的・対話的で、深い学びにつなげられそうだ。

5年 社会 7月13日（金）

学習問題 資料から特徴を探しだそう。

グループメンバー _____

学習の進め方

- 先生の指示で、ふうとうの中身を確認します。


入っているもの

資料5枚（すべて同じ都道府県の、ある地域の写真です）
- 5枚の資料から、ヒントになりそうな手がかりを探し、気付いたことを資料の空いているところに書きましょう。

この写真には、こんな特徴があるから、こういうことが考えられるよね。

- 見つけたヒントと地図帳や資料集を手がかりにして、
 - ① どこの都道府県で、
 - ② どの市町村なのか を探しましょう。
- グループごとに考えたことを発表しよう。
 - ① まず、グループで考えた地域を言います。（例：〇〇県〇〇市）
 - ※ 地図帳で、〇〇県〇〇市を探します。
 - ② 次に、資料から見つけた特徴を言い、そこから、どうしてその地域だと思ったのかを説明してください。

5 答え合わせ・今日のふりかえり



事例⑥

小学校

異学年合同の学び

自律した個の学び

遠隔合同の学び

6年

算数の単元末自由学習

栄村立栄小学校

実践スタイル 個の課題解決型学習と遠隔合同の学びによる主体的・対話的な学び

学習者のユニットとその意図

自律した個の学習を行うために、個別学習の時間を2時間確保する。課題の設定、取り組み方について、自分で考えて決定する。

個の学びの振り返りとして、遠隔合同の学びの場を設定し、お互いの学習成果を紹介すると共に、意見や感想の交換を行う。

単元のねらい

算数の単元学習を終えた児童が、自分で課題を設定し、課題への取り組み方を考えて、学習を行うことを通して、主体的に学ぶ姿勢を培う。また、個の学習成果を発表し合うことで、自分の学びの価値や新たな視点に気付くことができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

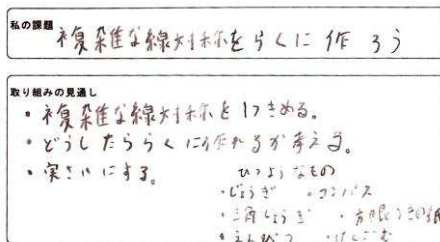
教材等

算数教科書、ドリル、問題集、Web 会議システム、書画カメラ

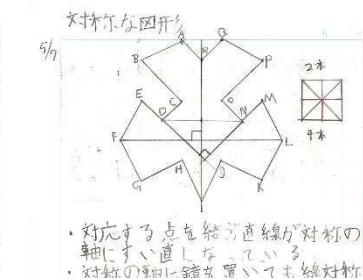
意 図

個の課題に取り組み、その学習成果を友だちにわかりやすく伝える。

単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
各単元末に自律した個の学びの時間を2時間設定する。 自律した個の学びの後、遠隔合同の学びの時間を持ち、お互いの学習成果を紹介し合い、意見交換を行う。	・課題を設定し学習計画を立てる。 ・課題解決に取り組む。	自律した個の学び	2時間
	・Web 会議システムを利用して、個の学びの成果を発表し、意見交換を行う。	遠隔合同の学び	1時間
	実施した単元（4月～6月） 対称な図形、文字と式、分数×分数 ※単元内における進度調整により、単元末自由学習の時数が生み出せた。		



自分の課題を明示し、2時間で取り組む学習内容の計画を立てる。
(学習カード)



対称な図形について、「教科書にはない線対称や点対称のきまりを見つけたい」という課題を持ちまとめた。
(児童ノート)



分数を表に示しながら、線対称になるペアの数が逆数になっていることを説明していた。
(スクリーンショットより)

事例⑥

児童の学び(自律した個の学び, 遠隔合同の学びによせて)

昨年度2学期, 算数の「単元内自由進度学習」に取り組んでみた。子どもたちは, 教科書の問題を解くことが勉強することだと思い, ページを進めることが最優先になっていることがうかがえた。また, 問題を解くことができても学習した内容について説明を求めると, 理解があやふやに感じられるようなこともあった。そこで今年度は, 単元の学習を一通り終えてから, 自分で課題を設定して, 見直しをもって学習する「単元末自由学習」に取り組んでみた。

単元を一通り学習してからであったので, 自分の課題を設定しやすかったと思われる。「対称な図形」では, 「難しい点対称な図形を描く」, 「教科書にはない線対称や点対称のきまりを見つけたい」, 「もう一度線対称や点対称の復習をして確認したい」という個々の課題をもつことができた。これは, 個のペースで学ぶということに加えて, 「個の学び」を保障する時間となったように思われる。この授業の後の学級だよりは, 「…何より, 子どもたちの集中力がすごかったです。一人一人の課題が違ったので話し合う姿はありませんでしたが, 全員黙々と進めていました。最初の1時間は授業が終わっても続けようとしていたので, 2時間目もスムーズに取りかかることができました。…」と書かれていた。児童の主体的な学びの姿が見られ, 子どもにとって必要感のある時間だったと推測できた。

また, 「分数×分数」では, 逆数について考察した児童がいた。分数を表に示しながら, 逆数が線対称となる数のペアになっていることを説明していた。これまでの単元で学んだことと関連させており, 深い学びの姿が見られる。また, 「2つの分数をかけてもひいても答えが同じになる分数」を見つけることを課題とした児童は, 「分子が1で, 分母が連番になっている分数」がそれに該当することを見つけた。そこで, さらに, 「分子が1でない場合」, 「分母が連番ではない場合」, 「分母が同じで分子が違う場合」についても検証を行った。同じ課題を設定していた児童から, 「自分の予想していた通り, 分子が1で, 分母が続いている2つの分数が, かけてもひいても答えが同じになる分数だと分かったら, そこでやめてしまったけれど, A君は, 同じにならない場合も考えていてすごいと思った。」と感想が述べられた。新たな視点に出会った驚きを感じられる。

活用効果 (アセスメント)

評価の観点	自律した個の学び, 遠隔合同の学びによって, 自己の学びを振り返るとともに, 新たな視点や考え方にふれることができたか。
具体的変容	自分で課題を設定して見直しをもち, 取り組み方を考えながら学んだり, 友だちの学びに触れたりすることで, さらに理解が深められたり, 新たな視点に気付いたりすることができた。

実践の手応え (エビデンス)

単元で学習したことを理解したつもりになっていた児童が, 自分で課題を設定し, 解決に取り組む学習活動を通して, 曖昧だった理解が確実なものとなったり, 自信をもって問題に取り組めるようになったりしており, 学習した内容の定着が図られている様子がうかがえた。また, 友だちの学びについての発表を聞くことで, 同じ課題に取り組んでいても自分と視点が違うことに気付けた様子がうかがえた。

事例⑦

小学校

異学年合同の学び

自律した個の学び

遠隔合同の学び

全

遠隔ミニビブリオバトル(書評合戦)

栄村立栄小学校

実践スタイル

ミニビブリオバトルによる遠隔合同の学び ～エリア, 学年を広げる～

本実践のねらい

遠隔ミニビブリオバトル(書評合戦)を通して、「読む、聞く、話す」というコミュニケーション力を向上させるとともに、他校児童との交流を図ることができる。また、読書への関心を高めたり、読書の幅を広げたりすることができる。

遠隔ミニビブリオバトルの広がり

2018年12月、栄小学校5年生でのミニビブリオバトル開催にあたり、定期的に遠隔合同授業を行っていた飯山市立東小学校児童に、個々の児童の発表を参観してもらい、感想やアドバイスを得るという授業を行った。そこから、遠隔合同の学びの具体として、飯水地区に広げることを考えた。

2019年7月、遠隔合同授業実績のある3校に飯山市立木島小学校を加えて4校で実施した。実施にあたり、飯水地区小中学校と飯山養護学校には、Web視聴可能であることを周知した。飯山小学校児童の聴講参加を含め、5校からの接続があった。10月の飯水地区8小学校での実施にあたっては、飯水視聴覚教育協会の事業として実施することを校長よりアドバイスされ、各校委員から技術的な支援を得た。

参加した児童からの「もっと遠い学校とやってみたい」、「他の学年とやってみたい」という願いを実現すべく、中山間地リーディング校に声をかけ、参加を希望した5学級とあわせて7校で、11月実施した。

バトルの流れ	実施概要	参加者	形態
司会進行は、代表児童が行う。 ・開会 ・発表順の確認 ・本の紹介 3分間の発表 +1分間の ディスカッション ×人数分 ・チャンプ本の決定 ・チャンプ本紹介者 コメント ・閉会	四校による実施(7/4実施, 18分間) ・司会：栄小図書委員長	栄小, 秋山分校, 飯山市立東小, 木島小 発表者は6年生 (飯山小は聴講参加)	休み時間の活動 参観は自由
	第1回飯水小学校遠隔ミニビブリオバトル(10/9実施, 40分間) ・司会：栄小図書委員長 *飯水視聴覚教育協会事業として実施	飯水地区八小学校 6年生(1校のみ4年生)	1時間の授業として 学級・学校ごとに参観
	第2回遠隔ミニビブリオバトル(11/27実施, 40分間) ・司会：秋山分校6年児童 ・発表順の抽選 ・発表者6名のため ディスカッション2分間	飯水地区五校六学級, 木曾町立三岳小学校, 飯田市立上村小学校 発表者は3～6年生 聴講参加者は1～6年生	



木島小児童による紹介場面<校名, 木島小ギャラリー加工>
(4校・ギャラリービューのスクリーンキャプチャ)



学級ごとにチャンプ本を決定
(第2回・栄小5・6年)

事例⑦

実施後のアンケート自由記述からうかがえる児童の学び

①つながる喜び

「ちがう小学校の人が近くにいる感じがして、とても楽しかった。」

「他の学校とはなれていても会話ができて楽しかった！
これなら、遠くの学校でもなかよしになれる。」

②広がる楽しさ

「人数が増えるとゴチャゴチャしてしまうけど、増えることによっていつもの遠くくよりもおもしろかったし、楽しかった。」

「四校合同のビブリオバトルよりも学校の数が増え、紹介された本も増えて、いろんな分類の本が紹介されて、自分の読みたいと思った本が増えて良かった。」

③新たな見方、考え方ももつ

「人数の分、考え方も色々あると思うので遠隔授業をぜひまたやってみたい。」

「いつも読む本のジャンルなどが決まっていたので、今回のミニビブリオバトルでいつも読まない本を読んでみればおもしろいかも。」

④感動、感心する

「どの学校も一生けん命にやっていて、すごく良いなー。」

「みんな初めてのビブリオバトルですごくはっきりしゃべれたし、質問もたくさん言えてすごい。」

⑤気付く

「1台のパソコンで、場所がはなれた8校と話せるのがすごい。」

「今の時代は、インターネットを使って遠隔でも話ができる事がすごい。」

⑥意欲をもつ

「みんなと交流して本を紹介したい。」「今度は、私も本を紹介したい。」

「最初は、ビブリオバトルは何かなと思ったけど、いろんな学校で本を紹介していて、どれもおもしろそうだったから、読みたいと思った。」

⑦新たな学びへの願いをもつ

「テーマを決めて」、「ちがう授業(算数、国語など)で」、「ちがう学年と」という記述が見られた。

⑧考える(問題点を指摘する、自己の考えをもつ)

「最初の人などが最後の方に忘れてしまうので、最初にやった人が不利だと思う。」

「ビブリオバトルをすれば本を読む機会が増えると思う。」



チャンプ本決定直前の紹介本提示場面
(第2回・スクリーンキャプチャ)

実践の手応え(エビデンス)

3回にわたり、エリアや学年を広げて実践できた要因として、以下の3点を考えている。

- ・児童にとって価値のある学びであった。
- ・学級担任の負担が少なく、やってみたいと思えるものであった。
- ・各学校にあるICT機器だけで実施でき、機器準備に関わる時間的なロスが無かった。

学級担任からは、「今までに経験したことのない学習スタイルがとても新鮮」、「学級でいつも同じメンバーで授業をしているので、このような形で、違う人との関わりも有効」、「授業の一環として、クラス内でもビブリオバトルをすることで楽しみながら本と触れ合うことができる機会になった」等の感想が寄せられた。教師も新たな学びの可能性を感じていたことがうかがえる。

児童の学びがどんなものであるかを考え、アイデアを出し合い協働的に実践することで、遠隔合同の学びを広げていくことができる。

